

---

# とある科学の能力記憶

久留間水樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の能力記憶

### 【NZコード】

N8162Y

### 【作者名】

久留間水樹

### 【あらすじ】

一步通行が2か月前出会ったのはとある実験によりボロボロにされたレベル4の少女、小鳥遊双葉だった。何故か双葉は義理の妹として部屋に居候（だけど金はちゃんと払ってる）することに。一方通行がお兄ちゃんというとんでもない設定ですが、なんか書いてると楽しい。凄く楽しい。読んでると楽しいのかもしね。そんな小説です。あと作者は義理妹とか妹とか妹設定が好き。とある魔術の禁書目録S.S。

## 第一話 一方通行と妹 なんでこいつはこんな扱いこくいンだ？

現在、巷はドキドキワクワクの寝ても怒られない5月のビックイベント、GWの真っ最中である。しかしそんなことは、一方通行にしてどうでも良いことだつた。今は、それより。

有り得ない、といつも朝に一方通行は恒例行事の様に思う。のそりとソファの上で体を起こした彼は、台所の方へと目を向けてた。

そこでは、可愛らしい少女が朝ごはんを作っていた。

「……有り得ねエ」

「あ、お兄ちゃん起きた？」

一方通行が起きたのに気づくと、少女は嬉しそうにひざへ駆け寄ってきた。

「朝、」はんもうすぐできるからね。ちょっとまつてね

一方通行の脇にたたんでおいた服を置き、もう一度ぱたぱたと台所で駆け回る少女。

少女の名前は小鳥遊双葉。たかなしふたば中学正確に言つないうま常盤台中学の2年生である。

そして、かなり優秀なレベル4の一人、なのだが

「有り得ねエ」

一方通行はもう一度咳いてソファに 台所の様子が田に入らないように反対側をむいて もう一度横たわった。

あの様子を見ていると、ただの女の子ではないか。

その様子を田ざとく見つけた双葉は「こらー！お兄ちゃん、早く起きないと健康に悪いよ？おひさまだよ？田がルンルンだよ？」と訳の分からぬことを口走る。

「うるせエ」

「お兄ちゃん、朝はん天ぶらがいい？ハンバーグがいい？」

「朝から重たすぎだ」

阿保かこいちは、と一方通行は半眼になりながらものそのそと起き上がり、冷蔵庫からコーヒーを出して口に含んだ。

双葉はほえーと間抜けな声をだして「ブラックとはお兄ちゃん凄いねー」と感心している。そんな彼女は砂糖と牛乳をいくらいでも苦い苦いとコーヒーが一切飲めなかつたりする。

こんな生活もこれで2ヶ月目に入った、と一方通行はうんざりした。

「オマエ、出てこいつとは思わねエの？」

「全然」

屈託の無い笑みで答えられてしまった。一方通行はわずかに黙り、そして

「殺すぞ」

「んー、いいよ？出来るものなら」

「……」

その挑発に、一方通行は双葉の体に触れようとした。

が、出来ない。

「……チツ」

「うん、お兄ちゃんは優しいもんね」

「……飯係が居なくなると思い直しただけだ」

双葉は笑つて一方通行にお皿を渡した。その上には先ほどいって  
いたハンバーグや天ぷらから、なぜか肉饅頭まで載つていた。

「……オマエ、ちょっとばランス取りやがれ。なんで洋・中・和  
の三点セットなんですかア？おかしいンじゃねエ？」

「えー、なんか冷蔵庫に残つてたのそれしかなかつたんだもん。し  
ょうがないよ」

「朝からマジ重いなア テメエの作る料理は」

一方通行は文句を言いながらもテーブルできちんと最後まで食べ  
た。その様子に、双葉はニコニコと笑つて

「お兄ちゃんはえらいねえ」

「……殴ンぞ」

双葉は一方通行の暴言には一切動じず、お皿を台所へ持つていつ  
て洗つてしまつた。

「どうもこいつはやりにくい。」

一方通行は着替えを済ませるとドアの方へのつそりと歩きだした。

「あれ？お兄ちゃん外出？双葉も行こうかな

「くンな」

「ん。分かつた」

なんでこんなときだけ聞き分けがいいんだよ、と一方通行は突つ込みたくなつた。

扱いにくい。それに、妙に素直。

それが一方通行がはじき出した、小鳥遊双葉への人柄だった。

「お兄ちゃん、無駄な喧嘩はよしてね」

「……うるせH」

「そういうときのお兄ちゃんはよく聞くもんね。じゃあ、いつでらつしゃい」

「……あア」

ムスッとした顔の一方通行が出ていくと、双葉はエプロンを外し、短パンに半袖というラフな格好になる。それから、することもないので部屋のお掃除をすることにした。それが終わつたら少なくなつてきた食料の買出しに行こうと頭の中で予定を組み立てる。

小鳥遊双葉。まだ中学生だが今すぐでもお嫁に行ける家事能力を身に付けていたりする。

一方通行はまだ朝になつたばかりの街をぶらぶらと歩いていた。別に目的があつたわけではないが、しかしあの家にいるよりは外に出たほうが楽だという理由だった。

あの小鳥遊双葉という少女は、2ヶ月ちょっと前の2月後半に出会つた。

何故だか一方通行になつてきて、部屋の前まで付いてきた拳句家から締め出すと朝起きたら玄関の前で寝ていた。マンションから放り出しても朝起きれば必ず玄関前にいる。完全な不審者だった。

もしこの場合、一方通行が女で、双葉が男であつたら捕まつたのは双葉のほうであろう。が、生憎と一方通行は男だつたし、双葉は しかも可愛らしい 女の子だったので、『近所さんから の目が痛い痛い。普段はそんなことを気にならない彼だが、連日色んな人に「君、あの子放つておくつもりかい?」「知り合いなんだろ?助けてやりなよ」と言われ続け、腹が立つたので家にあげさせた。次に、双葉は『金を払うからこにすませてくれ』と頼んできた。断つた。次の日には法律上義理妹になつていた。なぜだ。でもまあ家事をやつてくれるし便利ではあるので一応今は追い払うことしなくなつた。毎日朝から作る重い料理はかなり迷惑だが。

「チツ……」

舌打ちをする。それでどうにかなるわけではなかつたが、取り敢えず気晴らしだ。

そこらへんを彷徨いている不良にでも苛々をぶつけるか、と思つたが出てきたときに『無駄な喧嘩はしない』と約束してしまつたので何となくやりすらい。

一方通行はやはりそれにも苛々して目の前に置いてあつたバイクを蹴り飛ばした。バイクは一瞬にして鉄塊に成り果てる。

一度双葉を殺してやつたほうがいいかもな、と彼が物騒なことを考えていると

「あー」「オイオイ兄ちゃんにしてくれちゃつてんですかー?」「オレらの大事なバイクが台無じじゃねえか」「金払えよ」「ヒヤツヒヤツヒヤツ」

「取り敢えず殺そつぜ」「いいないいな」「で」と兄ちゃん手合わせ願いますよ」「ヒヤツヒヤツ」

後ろから、低俗な声がかけられた。

彼はめんどくさそうに一度舌打ちし　いいチャンスだとばかり後ろを向いた。

そこには、がらの悪い大学生風の男達が数人。

喧嘩を売られたんだからしょうがねエよな。

そう勝手な理屈を付け、苛々をぶつける対象を見つけた彼は、獰猛に笑つた。

「じゃ、こちらこそヨロシク頼みますよオ　三下」

数分後、その場には地獄絵図が展開されることになる。

兄がそんな憂さ晴らしをしているとは露ほど知らず、双葉は掃除を終え常盤台の制服に着替えた。

外出時には常盤台の制服を着るようになり、規則を真面目な彼女はきちんと守つていたりする。

彼女はるんると上機嫌で鞄を持ち、部屋から出た。

革靴の足音が、カツカツとテンポ良く、踊るように打ち出される。

1時間程で不良たちの組織は壊滅した。

どうやら一方通行が喧嘩を売られた（と思つてるのは彼だけであり、傍から見れば普通に彼が喧嘩を売つてはいる）不良たちは結構大きい組織の一員　スキルアウト　だつたらしく、仲間の敵討ちか何だか知らないが一方通行に大量の喧嘩をぶつかってきた。

これ幸いと一方通行も喧嘩を買つ。おかげで、かなりの苟々がこの1時間で解消された。

スキルアウトに感謝するなんて考えもしなかつたぜ、と一方通行は小さく奥の方でクックと笑つた。

と

「へー、君結構可愛いね」「おひまだ昼だぜ」

「お兄さんと一緒に遊ばない?」「何時になるんだよ

おや、まだ残党が残つていたのか、と路地裏で不良たちがたむろつている所へ一方通行が覗いてみると

双葉がいた。

「……チツ」

不良に囲まれた双葉は別に怯えてはいるものの、戸惑つている。彼女はレベル4だ。見るところあの不良たちの能力はさして高そうにも見えず、同じレベル4でも、双葉にかなう相手など一人もいなはずだ。

レベル4の中でのトップ。それが小鳥遊双葉なのだから。で、なぜ彼女が戸惑つているかというと、それは彼女の優しさからくる。

能力を使えば一発なのだが、それを使つていいか分からないというか、使つたことにより怪我をさせるのが申し訳ないらしい。どうせ後で治してやるんだからいいんじゃねえか、と一方通行が呆れたほどだ。

ついでに、双葉を取り囲んでいる不良たちは双葉が戸惑つているのを力が弱い、または攻撃系の能力ではないため反撃できないつまり、ただの女の子と変わらないと思つていろいろらしく、見るからに鼻の下を伸ばしていた。

「ねえ、君何年生?」「それ常盤台だよね?」「中坊にしげや中々悪くない顔立ちだな」「俺好み」

そんな気持ちの悪い言葉が風に乗って聞こえ、一方通行は顔をしかめた。

そして、双葉をさつさと連れて帰ろうと彼が足を踏み出さうとした瞬間

「！」、「めんなさい」

その瞬間、双葉を取り囲んでいた不良達がボワッと仰け反った。小範囲の爆風でも起こしたのかもしれない。

「なつ、てんめ…っ」「オイ、こいつやるぞ…」

「皆でかかれば大丈夫だ」「何といってもただの女だしな」

双葉は眉を下げた。それにより、不良たちはさらに興奮する。大方、双葉が自信を無くした、とでも思ったのだろう。自分たちならばこの少女を簡単に潰せるとまで思ったのかもしれない。

が、違う。

双葉は、やはり相手が怪我をすることを、申し訳なさがっていた。

「あの、怪我したくないなら……どつかへ行つた方がいいと思いますけど」

双葉の忠告に「なんだろ「ルア！」と不良たちが色めき立つた。双葉には申し訳ないが当たり前である。

「えと、じゃあ、んー……」「、ものが多いんですね

双葉のつぶやきに、不良たちは「はあ？」といつ顔をした。  
そして、双葉は言ひへ。

「なので、物でもぶつけで倒させて頂きます」

その瞬間、不良たちの頭上には大量のバールやゴミ箱、何故か車の扉部分などが現れ、そして落ちた。

勿論、双葉は一步たりとも動いていない。

ドガバキヤグキ、と嫌な音がしてそれらが男たちと共に地面へと伏した。

「……んー、路地裏、今度から使うやめよ！」

「当たり前だろ、ンなもン」

双葉が男たちの怪我を治そうとしゃがみこんだのと、一方通行が双葉の方へ歩きだしたのはほぼ同時だった。

双葉はえ？え？と困惑した顔を浮かべた後、

「お兄ちゃん！？なんで！」「ー？」

「たまたま見てた」

「えー、なら助けてよー」

助けなくとも自分でも対処出来るだろ？が、と一方通行が吐き捨てるが、それとこれとは違うのーーと反論された。意味が分からない。

双葉はきょろきょろと不良たちを見渡し、主だった怪我をしているものの傍に駆け寄つて、その怪我に手を触れた。その瞬間、その怪我は消える。

「……”能力記憶”ねエ……」

一方通行は独りごちた。

爆風を巻き起こしたのは『風使い』の能力。

男たちの上に物体を表したのは『座標移動』の能力。

そして現在怪我を治しているのは『肉体再生』の能力。

双葉が持っている能力は”多才能力”<sup>マルチスキル</sup>ではない。むしろそれを逆手にとったような能力である。

『能力記憶』<sup>スキル・メモリー</sup>。自分が見た能力を自分の能力レベルで操れる能力

つまり、言い換えるならば”多才能力を作るための能力”とでも言うべきか。

滝壺とは根本が似ているものの、實際にはかなり近い。

つまり双葉が持っているのは、”他人の能力をコピーする能力”なのだから。

反則技とも言える能力である。一人で学園都市全員の能力者勿論レベル5の力は再現できないが、を演じて見せることだって不可能ではないはずだ。

だからこそ、彼女は『レベル5候補生育成プログラム』の一人に抜擢され、一番優秀な成績を収めたのだろうから。

が、今のところそういうのはどうでもいい、と一方通行は思つている。

だから、今は。

「オイ、帰ンぞ」

「あつはーい！」

双葉はぱたぱたと一方通行の方へと駆け寄ってきた。

一歩通行はそれを待たず、さき先行つていしまうが、双葉はその距離を空間移動で詰めた。

二人は、仲良く 結構一方的に 家路へと帰ることになるのだった。

## 第一話 一方通行と妹 なんでこいつはこんな扱いにへいんだ？（後書き）

感想評価、頂けたら嬉しいですー。ちょっと滝壺のところ曖昧かも…。』  
指摘頂けたら嬉しいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8162y/>

---

とある科学の能力記憶

2011年11月24日18時52分発行